



「わらじばきの宣教師 A.D.ヘール」



2025 年 8 月

法人事務局 川畑 さとみ

小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

(ルカによる福音書 12 章 32 節)

A.D.ヘール（アレキサンダー・ダーハム・ヘール）が米国カンバーランド長老教会の宣教師として日本に派遣されたのは 1878 年（明治 11 年）の秋の候、大阪川口居留地に居を構えて、教育伝道に力を入れられました。そしてその働きは、清教学園とも深い繋がりを持つことになります。1905 年（明治 38 年）河内長野教会を創立させた後、河内長野においてヘール宣教師の最後の受洗者となったのは、清教学園中学校・高校の初代校長となられた植田真一先生なのです。

さてここでは、中山昇先生の著書『A.D.ヘールに学ぶ』から A.D.ヘール先生の人柄、功績、境遇を短くご紹介いたします。

「一行三人は紀の川沿岸の各地で説教会を開き、大和に入ろうとして待乳峠を超えたが、ヘールの口ひげは凍って氷柱を垂れていた。（中略）その翌日ヘールは靴の下にわらじを重ねて履き、天辻峠のしゅん嶺をよじ登ったが、積雪すねを没する有様で、日没後漸くにして坂本につき、説教会を開いた。その翌々日、十津川郷の池穴村に向かった。そこには二村隆太郎という求道者がいたので、ヘール先生は昨日の如く靴の下にわらじをしばりつけて、険しい山路を歩いた。（中略）古来このあたりは狼が出没するので危険区域として有名であった。一行は勇を鼓して山城を突破していると、前方から二村家からの出迎人があらわれ、案内されて池穴村に達した。夕食後直ちに説教会を開き、説教後二村家の主人と、その男子二人にヘール先生は授洗した。之がため二村隆太郎は五条裁判所に召喚され、無断で外人を宿泊せしめたかどで、罰金刑に処せられた。」（紀北伝道より）

雪の山可をすべらぬ為に、わらじばきで一人の求道者を訪ねて歩かれた先生の伝道の姿は、まさに迷える一匹の小羊を導く羊飼いの姿と重なります。そしてこの後、三重県の四日市にも伝道されています。

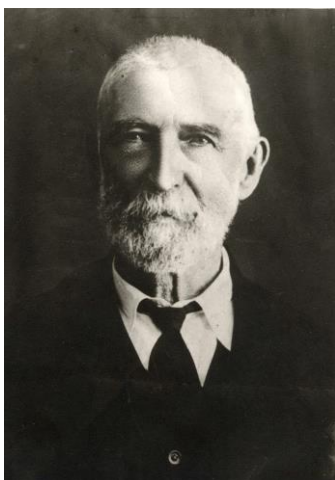
「当時の旅行には外国人は旅行免状が必要で、どこに行っても巡査の監視を受けなければなりません。また宿屋に泊まる時でも、いつ巡査が調べに来るかわからず、巡査が来た時には、夜 1 時でも 2 時でも起きねばならなかった。また、鉄道も通っておらず、大津、長浜を通過して名古屋にゆき、そこから船に乗るか、堺から小さい蒸気船に乗るより他に道はありませんでした。それゆえに大阪から四日市まで 3 日か 4 日かかりました。」（四日市伝道より）



今なら、近鉄特急で1時間少々の道のりを4日もかけて伝道された功績は、大阪から和歌山、そして三重へと着実にそこに教会を根づかされたのです。また別の章では、日本で宣教するために家族との別れを余儀なくされる現実が記されています。

「宣教師がその使命に召される時、異国での不自由な生活は覚悟の上と言いながら、実に多くのものを神様のために捨てることを強いられる。言語の障害、風土の違和感、感情の齟齬、生活の不便、出世や成功と無縁な忍耐、数え上げればいくらでもあろうが、想像し得る最も大きな寂しさは、愛する者との別離ということであろう。手もとに置いて教育出来る小学生ぐらいまでは、母親が教師を代行することも考えられる。しかし、それ以上は無理だ。愛する子供と別れて暮らさねばならぬということは厳しい。しかも、ご夫妻は先年トリンダットの駅で、15歳の息子ジョンを見送ってから、実に9年の間、一度も逢っておられないのである。」(宣教師の十字架より)

宣教のために、日本の同胞のために反動と戦争の時代を耐え抜いて生きてこられ、一門一族を挙げて、その生涯を捧げ尽くし、文字通り日本の土となられた A.D.ヘール夫妻、弟 J.B.ヘール夫妻、息子 J.E.ヘール夫妻は世界宣教史にも類例がないといえます。そして、一途にいのちの種を撒かれたキリスト教伝道の開拓の精神は、今もなお引き継がれて多くの人に祝福を与えてやむことはありません。



A.D.ヘール宣教師
(1902 年撮影)